

スナップエンドウの出荷開始

当丁A管内で、5月6日(金)からスナップエンドウの出荷が始まりました。ハウス栽培の「ニムラサラダスナップ」33キロが若美野菜選果場に持ち込まれ、男鹿地区営農センターの職員が生産者とともに、莢の傷やがくの状態などを確認しました。検査を経た初出荷のスナップエンドウは、横浜丸中青果へ出荷されました。

昨冬の大雪の影響で昨年より5日遅いスタートとなりましたが、4月からの好天で生育が順調に進んでおり、ハウス栽培での収穫は6月中旬まで続く見込みです。露地栽培では6月上旬から出荷が始まり、中々下旬に出荷のピークを迎えます。

今秋デビュー「サキホコレ」の栽培始まる

今年秋に本格デビューする秋田米新品種「サキホコレ」の、今年産の栽培が始まりました。

5月10日(火)に苗代研修会が秋田市内の5か所で行われ、当丁Aの栽培研究会の生産者らが、育苗用ハウスの中で苗の色や長さ、根の張りなどを確認しました。苗の生育経過や、田植えの適期なども話し合いました。秋田地区営農センターの営農指導員は「栽培要件を守り、全員で足並みを揃えて高品質な『サキホコレ』を生産しよう」と呼び掛けました。

管内では今年度、78戸の生産者が「サキホコレ」に取り組んでいます。田植え作業は14日(土)から22日(日)頃にかけて行われました。



「サキホコレ」の苗を観察する生産者ら



選果場に持ち込まれた初出荷のスナップエンドウ

NEWS & TOPICS

スマート農業の実証試験進む

スマート農業が管内でも広がりを見せており、各地で実証試験が行われています。

5月18日(水)、人口知能(AI)による栽培管理支援システム「ザルビオフィールドマネージャー」(ザルビオ)を活用し、基肥肥料の散布量を現在位置に応じて自動で増減して施肥する実証試験が(農)はたやファーム(秋田市河辺)で行われました。ザルビオとJA全農の営農管理システム「ZIGIS」を連携し、昨年に稲の密度や収量が比較的少なかった箇所には肥料を多く、密度が多かった箇所は散布量を少なく調整したデータを生成しました。全地球衛星測位システム(GNSS)や自動運転に対応した田植え機にデータを読み込むことで、田植えしながら自動で施肥量を調整して散布できます。施肥作業を効率的に行うことで、省コスト化や、生育のむらを減らして品質や収量の安定化を図ります。

20日(金)には自動運転田植え機による移植作業の実演が、同市太平の水田で行われました。位置情報を利用した直進や旋回などに加えて、圃場の広さや形に合わせて田植え機が自動で植え付けルートや条数などを調整しました。株間を一定に保ちながら田植えを行うこともでき、自動運転によって田植え作業の省力化が期待できます。

ドローンを活用した除草剤の散布試験も25日(水)に上新城地区で、6月1日(水)に四ツ小屋地区で行われました。今後も肥料の効きや生育経過、収量などの調査が進められていきます。

ザルビオのデータを活用して施肥量を調整しながら行う田植え作業



条数を調整しながら苗を移植する自動運転田植え機

